
空ノトリカゴ小話

天宮 遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空ノトリカゴ小話

【Nコード】

N2401Z

【作者名】

天宮 遙

【あらすじ】

空ノトリカゴ本編に入れられなかったエピソード類。時系列順にはなりません。

入学前のヒトコマ（ジヨゼ）

雨が城と共にしかやってこないこの国において、良い土地とはすなわち雨が多く水が入手しやすいところという暗黙の了解があった。城は巡回航路に乗って国中を巡る。

その軌道は出来る限り満遍なく回ろうとしていたが、それでもやはり偏りは存在する。

雨が他のところよりも少ない地域と、雨が多い地域と。

前者はスラムとして多くの人々を受け入れる受け皿となり、後者は貴族の住まう高級住宅地となった。

だが、貴族のステータスでもある長雨も、豪華な部屋の中で一人テールブルで本と睨めっこする幼い少女には憂鬱なものでしかなかった。

「……魔法は呪文を唱えることにより虚空にその構成を導き出し、それを意志の力を持って発動させる。その発動した魔法の力の強さは単純に術者の魔力に比例する。一度魔法をかけられた物体に再度魔法をかけるには前の術者に匹敵する魔力が必要である」
ぐううううう、とただっ広い部屋に怪音が鳴り響いた。

それでも、少女は本の朗読をやめようとはしなかった。

「再度魔法をかけるにはまず前の術者の用いた魔法に実際触れ、解析する必要がある。その後には前の魔法を解除する構成を描き出し、その上で新たな魔法をかけるという手順をとる。この解析の時点で時折、前の術者の思念が虚像となって術者の前に現れる事があるが、それはその魔法に込められた前の術者の尋常ならざる思い入れ、意志の強さを表すもので、その場合魔法の解除には多大な労力を強いられることになる。なぜならば新たな術を施そうとする術者にも前の術者と同等以上の意志の強さが必要となるためである」

きゅるるるる、と音がして、今度こそ少女は本を投げ出して窓の外を眺めた。

「……鬱陶しい雨」

視線の先にある庭には、水を潤沢に使える一部の者にしか許されない噴水や水路が張り巡らされていたが、少女はその贅沢さに気付くことなく溜息をつき、視線を時計に向けた。

「もう三日目にもなるのに、まだ親族会議は続いているのかしら？」
そろそろ夕刻を示す時計から視線を外すと、少女は盛大にテーブルに突っ伏した。

少女が住まう広大な邸宅。

その中央の大広間では今、大勢の親族が一同勢ぞろいして間に休憩を挟みながらも不眠不休の勢いでもう六十時間近く議論に明け暮れていた。

「まったく、一つの結論を出すのにどれだけ時間をかければ気が済むのよ？」

「その結論に辿り着きたくないから時間をかけて議論するんですよ」
音もなく少女の部屋に入ってきた青年は本を投げ出してテーブルに突っ伏している少女を見てあきれ果てた。

「ちゃんと勉強してましたか？一瞬の気の緩みが怠惰を引き寄せ、結果魔法界で落ちこぼれることになるんですよ」

「ちゃんとしてましたあ、レイの意地悪。見れば判るでしょう？レイに与えられた課題全部こなして、復習までしてたわよ」

「宜しい」

レイと呼ばれた青年は小さなバスケットをテーブルの上に置いて少女 ジョゼの正面に座ると、少女の手元から紙をとって目を通し始めた。

「……………」

「そうですね、まずまずの出来ですね。細かく答え合わせしますから、その間こっちの問題をしてみてください」

にこりともせずレイはジョゼに新たな問題を書きとめた紙を差し出した。

だが、ジョゼは問題文を一読するとじっとレイを見詰めた。

「……………」

「私に何か話すことは無いの？」

「何をです？」

どこまでもすつとぼけようとするレイの態度に、ジョゼはとうとう堪忍袋の緒が切れて勢いよく立ち上がった。

「今までお父様たちの会議盗み聞きしてきたんでしよう！？なら、何がどうなってるかくらい教えてくれたって良いじゃない！私の将来のことを話し合ってるのよ、あの人たち！なのに当の本人の私の思惑なんてほつたらかして！！」

一気に叫んだせいで肩で息をしているジョゼの前に、レイは冷酷に言いきった。

「自業自得です」

「何処がよ!？」

「後先考えずにとりあえず自分の言いたいことを言いたいだけ好き放題言ったこと、まさか忘れたとは言わせませんよ」

完全に据わりきった目で睨んでくるレイの眼差しを受けて、ジョゼはうつと言葉に詰まって大人しく椅子に座った。

彼もまた、少女の発言の煽りを食って三日間寝てない種類の間だった。

「ま、お嬢様があの発言をなさったのも同情の余地がありますし、集まった金の亡者どもが缶詰になって檄を飛ばしあうのも理解出来ますがね。ですがお嬢様の言い出した突拍子も無い提案は、あの腹黒くてずるがしこいばかりの親戚縁者みんなにとっては死活問題だということくらい、判っていただかないと困ります」

「小父様たちの都合なんて私の知ったことでは無いわ。私は至極当然のことを言っただけよ。私にだって選択する権利がある筈でしょう？なのに、小父様方が連れてくるのは脳みそが足りないどころか無いんじゃないかと思えるくらい間抜けで、自尊心と自己権意欲だけは極大まで肥大化した馬鹿ばかり。そんなのを相手し続けるのはもう沢山なの」

つんとすまして腕組みをした少女に、彼は溜息をついた。

彼女が爆弾発言をしたのはかれこれ三日前。彼の主人であるこの家の当主の誕生日の宴席でのことだった。

居並ぶ一族重鎮たちを目の前に、わずか八歳の少女はすつくと立ち上がって滔々と次の言葉をよどみなく言い切った。

『この家は私が継ぎます。婿をとって家を預けようという気はありません。古くは国の礎を築いた大魔道師に行き着くラ・ブリュイエール家が魔法の力の弱いものなど当主に据えれば歴史に残る笑いものになりましょう。なので、私は魔法を学ぶべく王立の魔法学校へ進学いたします。幸い古くから懇意にしてくださいとされている魔法学校校長にして王宮付きの魔道師筆頭、アーデガルト様も私の素質を高く評価してくださいとされています。私の意見に異議のある方は自ら私以上の力をお示しになってください』

貴族の筆頭名門、王家に次ぐ地位にあるラ・ブリュイエール本家に跡継ぎが中々生まれなくてやきもきさせられた十数年。

その後ようやく女兒が生まれ、やれやれ、本家はどこか分家どころから適当に（すなわち適切に、かつ権力バランスを考慮してさりげなく対抗馬を蹴落としてつつ自分の手駒を持ち上げ、最終的には上手い落とし所を探し当てた後に）婿をとってブリュイエール一族の次代を担わせようと一族郎党皆水面下の争いを始めて八年目。

まさかこんなとんでん返しがやってこようとは誰一人として思い描いていなかったに違いない。

今まで彼女は自分に権力と栄光を運んできてくれる可愛いお人形にしか過ぎなかったのだから。

当主の誕生祝の席は一瞬にして一族の最高会議の様相を呈したのは致し方の無いことであった。

「それで、ハンストはいつまでお続けになるおつもりですか？」

「勿論、頭の固い小父様方が残らず一掃されるまでよ！」

憤然と言い切ったジヨゼを見て、レイは溜息をついて課題に赤インクの印を入れた。

「ま、お嬢様が勝手に餓死の道を選ばれるのは構いませんが、私の

課題ぐらいきちんとこなしてただかねば困ります。お嬢様を出来損ないなんか育て上げたなら私の評価にかかりますからね。前も間違えてましたよ、ここ」

「え、嘘！あんなに見直したのに！！」

レイから答案をひったくって齧り付くように答案に没頭するジヨゼに、レイはさらに追い討ちをかけた。

「ハNSTトなんかして頭に栄養やってないからそんな馬鹿なミスをするんです。私の生徒が二度も同じ間違いをおかすだなんて許しません。観念してこれ食べてとっとと栄養補給してください。ハNSTトは中止です」

そう言うと、バスケットの中から大きなオレンジを取り出し、でんとジヨゼの目の前に置いた。

少女はごくつとつばを飲み込んで目の前のオレンジを見た。

つやつやと輝く橙色のはだ。

さっき置いた時、重い音がした。中はきつときっしり詰まっているに違いない。

きつとナイフで切ったらみずみずしい実が中に隠れているのだろう。食べたならきつと甘酸っぱくて、そして……。

だが。

「……駄目」

ジヨゼは自分の解答用紙でオレンジが視界に入らないように遮って、頑張つてそれに手を伸ばさないようにしていた。

「駄目、レイ、それ見えないところにしまつて頂戴。魔法に必要なのは日々の努力と意志の力だつてレイも言つてたじゃない。私、今ここでオレンジを食べてハNSTトを中断するわけにはいかないの」「半ば怒つたような口調でジヨゼはレイに言いつけた。

その途端、鉄面皮のレイの顔が少しほころんだ。

「……合格ですよ、お嬢様」

「は？」

吃驚して我を張っていたのも何もかも忘れてジヨゼがレイを振り返

ると、レイは微笑みどころか拍手までつけてもう一度同じことを言った。

「合格です、お嬢様。魔法学校への進学決定、おめでとございませす」

部屋の中にレイの拍手だけが木霊すること数拍。

「本当に！？本当に私学校に行つて良いの！？」

「こんなことで嘘ついてどうするんですか？」

「レイなら嘘吐きかねないからよ！やったわ！私、とうとうあの頑固親父たちに勝つたのよ！！」

嬉しさの余り部屋中駆け巡つてはしゃぎまわるジョゼを尻目に、レイはバスケットの中からオレンジどころかサンドイッチやジュースまで取り出してテーブルの上に並べだした。

「この三日間の課題は全て会議の場に提出させていただきました。

流石に、魔法学校の高学年の学生が解くような問題を次から次に解かれてはあの判らずやたちも認めざるをえなかったようです。後はお嬢様の意志の固さを確認するために、オレンジが意地汚いほど好きなお嬢様が手を伸ばさないのであれば、ということでも勝手に最終試験をさせていただきました。お許しください」

「そんなのどうでも良いわ！私、とうとう魔法学校に行けるんですもの！」

喜びの余り寝室まで駆けてベッドの上でピョンピョン跳ねだしたジョゼを引き戻すため、レイは寝室のドアを意味ありげにノックした。「とつととテーブルに戻つてお食事とつてください。言つておきませけど、進学は主席死守が条件ですよ。いみじくもブリュイエールの名を戴く者が他の誰かに遅れをとることなど許さぬ、とお優しい小父様方は息巻いています。お嬢様が一度でも主席から落ちれば即退学、一族のどこかから見繕われた馬鹿なボンボンと結婚ですから、頑張ってくださいね」

「嘘！」

夢から覚めたようにがばつと起きだしたジョゼに、レイは親指で今

まで居たテーブルを指し示した。

「ですから、とつとと食べて、とつととお勉強再開です。言っておきますけど、主席死守はかなり難しいですよ。でも、ま、私が教えるんですから何が何でもその地位に齧り付いていただきます」
さらつと恐ろしいことを言ったレイの顔はいつになく楽しそうだった。

「ねえ、魔法学校ってどんなところかしら？」

「お黙りなさい。おしゃべりしていると、頭の中で組み立てた折角の理論が紙に書き起こす前に消えてしまいますよ。」

「良いじゃない、少しくらい。レイもそこへ通ってたんでしょ？
どんなところだった？」

目をキラキラと輝かせながらレイの顔を覗き込んでくるジヨゼを見て、彼は仕方がないか、と諦めにも似た感情で笑った。

その昔、自分も入学が決まった時は同じくらい興奮して手がつけられなかった覚えがある。

あの時はもつと少女より年嵩だったが、と彼は思い出の引き出しを久しぶりに開けた。

「そうですね、学校の中に入って、一瞬ここは別世界かと目を疑いましたね。本当に信じられない光景が広がっていて……」

天国はこんな風なところなんだろうか、と思つた少年時代。
純粹に上のみを見続ける事が出来た、あの頃。

過去におぼれそうになつた彼を、はしゃいだ声が遮つた。

「そんなに綺麗なところなの、学校！？」

「そうですね、お嬢様には私ほどの感動は無いかもしれませんが」

「えー、どうしてえ？」

駄々っ子のように尋ねる少女に対し、彼は微妙な笑顔を浮かべた。
ふんだんに水を使った噴水も、庭や回廊に張り巡らされた水路も、目の前の少女にとっては見慣れたものだ。

城がめぐってくるたびに壺を抱えて走り回っていたスラム出の自分

とは違う。

「でも、どうしてレイは王宮に仕えなかったの？成績、良かったんでしよう？」

ふと、少女が子供特有の前後の脈絡の無い突然の話題転換をしてきて青年は一瞬、不意を突かれて微妙な間が空いた。

「……私はお嬢様と違って、とつても柔軟な神経をしていましたので」

「なによ、それ、どういう意味よ!？」

ぷうっと頬つぺた膨らませてくれたジョゼの額をレイは人差し指で小突いた。

「教えたでしょう、魔法を使うには意志の力が必要だと。私は素質だけなら十年に一人の逸材といわれましたし、理論体系も抜群に出来ましたけど、面倒くさがりだったんですよ。疲れる事がキライで、大きな魔法使うのが面倒で。それがアーデガルト様はじめ主だった魔道師皆に知られてましたからね。こんな不安定なのを王宮に雇うわけには、と採用されなかったんですよ。お嬢様なら大丈夫、お嬢様は百年に一度の才能の持ち主で、強固な意志の力をお持ちですから」

「……暗に強情って言ってない、レイ？」

「気のせいですよ」

青年は仮面の微笑を顔に張り付かせた。

だが、その内心では異なることを思っていた。
魔法学校。

彼が逃げ出した場所。

この王国のあらゆる暗部が詰め込まれた場所。

いずれは、目の前の少女が全て背負わねばならないもの。

自分は、恐怖で身動きが取れなくなり、そしてそのままブリュイエールに預けられた。

秘密を知るものとして、監視されるために。

結局のところ、彼には幼い少女を護ることも導くことも出来ず、た

だ、恐怖へと一直線に続く道行きをまっすぐ手を引いてやることしか、出来なかった。

入学式

蒼一色に染め上げられた空の下。

アラム・ベリエルは白大理石の門柱の前で一人、じつと門と、その奥の建物を見上げていた。

そんな彼をある人は苦笑しながら、ある人は不思議そうに気にかけてながらもずいずいと奥に入っていく。

何故なら、彼らの目的はこの門の奥にこそあるからだ。

この門の奥　国内最高の魔道師を輩出し続ける、王立魔法学校。その入り口で彫像のように固まること十分、漸く彼に声をかけるものが現れた。

「ねえ君、そんなところで何をしているんだい？君も、王立学校の新入生？そろそろ行かないと入学式始まっちゃうよ？」

アラムがはつとして声をかけられた方向を見ると、彼より少し年上の少年が人懐っこい笑みを浮かべて立っていた。

金髪のやわらかい巻き毛をリボンで一つにまとめたそのしっぽを指先でくるくる弄びながら、少年はじろじろとアラムのことを見回した。

「……あの、何か？」

明らかに品定めされている居心地の悪さに身動きしながらも、上質のものに身を包んでいる、明らかに貴族の少年に一応アラムは丁寧に質問した。

「……うん合格！」

「は！？」

何が！？とアラムが問い返す前に、少年はぐいっと彼の腕を掴んで強引に歩き出した。

「いやー、今日は良い日だ！あ、僕の名はクリストフ・セドリック・セバルカンティ、クリスと呼んでくれ。今日からここの一回生だ。君は？」

「あ、ぼ、僕はアラム・ベリエル……」

大股で早歩きするクリスに振り回されるようにしてアラムはついていっていたが、そんな事はお構いなくクリスは学校内を右に左に、迷うことなくまっすぐに道を行く。

「ベリエル……聞かない名だな……」

そう呟きながらもクリスの足は止まらない。右の生け垣を突っ切り、左の回廊を突進しながらクリスはなおも頭の中の人物名観を探っているようだ。

そうして全力でひっぱりまわされること五分、アラムはたまらず声を上げた。

「あの、クリス！僕たち何処に向かっているんだ!？」

「何処って、ここだけだ」

何の感慨もなくクリスが指差したのは、門から一直線に真っ直ぐ来れば着く、白亜の大聖堂。

「……どうしてあっちこっち引きずり回したんだよ？」

「だってねえ……」

クリスは秀麗な顔を人懐っこい笑みで崩しながら言い切った。

「そっちの方が楽しいじゃないか。人生、寄り道回り道バンザイ、てね」

「……オイ！」

「君が門をぼけーっと馬鹿みたいに眺めてたときから、君とは良い友達になれそうな気がしたんだ。これから八年間の学校生活で、神々が嫉妬するほどに麗しく、気高い友情を築こうではないか！」

あっはっはっは、とやけに芝居がかった笑い声を上げるクリスに引っ張られるようにしてアラムは大聖堂への階段を登り、入り口のホールをまっすぐ通り抜けた。

と、いきなり目の前がひらけて。

そこはまた、白一色の回廊だった。

円柱のみが規則的に配された幅の広い廊下にはそこにテーブルと椅子が配され、思い思いの場所に研究者や学生が陣取って討論や

読書に打ち込んでいた。

その回廊に囲まれた中庭には、真ん中に大きな噴水が置かれ、そこから湧き出した水が張り巡らされた水路を流れて、その両側には水を大量に必要とする園芸種の花が咲き乱れていて。

回廊の屋根にはまた水路と花壇が据えられ、その水路の水は滝となつて回廊のそこから水飛沫と軽やかな音を奏でながら流れ落ちていた。

あつけにとられて言葉を失つたアラムを見て、クリスはくすりと笑つた。

「ああ、君は庶民の出なんだね。だからベリエルという名を聞いた事がなかったのか」

アラムは自分の出自を笑われた気がしてクリスを睨みつけると、彼はその視線に気づいて、今までの笑顔とは違う、冷たささえ漂う微笑を浮かべた。

「欲得ずくの貴族どもなら、この庭を見て自分の家のほうが立派だと自慢するに決まつてるからね。馬鹿馬鹿しい」

「……クリス？」

いきなり雰囲気の変つた少年に驚いてアラムは声をかけたが、その途端、クリスは今までの人懐っこい笑みに戻つた。

「ところで突つ込んだ話をするが、アラム、君庶民の出つて事は将来王宮魔道師目指してたりするわけ？」

「……まあ、ね。コネが無いから役人にはなれそうにないし、力が無いから軍も無理だし。そうなると自然に、ね。母が病気で寝込んでるから並の稼ぎじゃ中々苦しくて……。本当はここに進学することすら躊躇われたんだけど、入学試験に立ち会った先生方が奨学金なんかを色々進めてくれて、それで何とか」

「奨学金！？」

いきなりクリスの目の色が変わった。

「いやあ、やつぱり、僕の人を見る目は確かだったってことか？」

ぱああつと周りに花と光を浮かべかねない雰囲気のクリスに、アラ

ムは一步後退りした。

と、その時早く、かの時遅く、アラムの手をクリスが両の手で捕えた。

「おめでとう、アラム！君は類稀なる才能ととてつもない幸運のその両方を手にしているようだ！君がこの年に入学をすること、そしてこの僕に出会ったという事はかけがえのない幸運事として君の人生に燦然と金字塔を打ち立てることだろう！」

「あの、話が見えな……」

「ということで、アラム、僕の家を君のパトロンにさせてくれないだろうか？」

「はあ！？とアラムが素っ頓狂な声をあげるまもなく、クリスは「僕ってなんて幸運なんだろう！」とまたもや自分だけの夢の世界に突入していつていた。

流石に我が身に関係することあつてはクリスをそのままにしておくことも出来ず、アラムは彼を現実世界に引きずり戻した。

「あのさ、どういふことか、よく判るようにゆっくり説明してくれないか？」

結構本気の力を込めてクリスの腕を握ると、クリスはやんわりとその手を外しながらアラムの希望通りにゆっくりと、判り易く説明を始めた。

ただし、彼の基準において。

「話せば長いんだけど、今年はやけに貴族の入学者が多いと思わないか？」

「……いきなり話が全然関係ない所に飛んでる気がするんだけど」

「長い話のうちに君の知りたい所に着地するよ。ま、多いんだよ今年は。特にブリュイエール一族の人間が。僕を含めてね」

「ブリュイエールって……」

アラムはクリスの口にした名に敏感に反応した。

その名は、言葉を話せるものは誰もが知っていた。

「貴族の筆頭名門、王家に次ぐ家柄、国開きの魔道師を輩出した一

族の人間なんて普通は魔法学校は必要ない。ここと同程度の教育なんて一族の力を持つてすれば楽に用意できるからね。だが、今年は違う。なんとたつて一族の惣領姫がご入学遊ばされるんだ。姫の最近のぶっ飛んだ言動を君知ってる？自分より魔法を使える人間が居なければ自分で家を継ぐんだつてさ！いやあ、久し振りに笑ったね、姫の発言の後の長老たちの啞然とした顔！」

あつはつはつは、と芝居がかった笑い声をたつぷり五秒は響かせた後、クリスはいきなり真面目な顔をしてアラムを振り返った。

「さて、ここからが君にも関わってくる話だ。姫は学年主席から転がり落ちると即退学、即結婚つて一族の長老たちから言われていてね。じゃ、もし本当に姫が主席から転落した時、そこで問題になるのが姫を暗黒の運命に貶めさせた悪役が誰かってことでね」

「別に誰でも良いんじゃないのか？」

お偉い貴族様の家庭の事情とやらには全然興味のもてないアラムは適当に相槌を打った。

が、クリスは芝居がかった調子でチツチツチツと人差し指を顔の前で振って見せた。

「甘いね、アラム。もしそれがブリュイエールの人間なら万々歳、晴れてそいつの両肩にはブリュイエール一族の未来の重責がのしかかる。だがブリュイエールの人間じゃなかったらどうなるか。もしかしたら、力の強さを見込まれて婿に請われて将来王の左に坐すことだつて夢じゃないかも」

「……生憎、俺は貴族の頂点に立ちたいんじゃないんだけど」

「今の発言でブリュイエール一族にとつて君の利用価値はさらに跳ね上がったよ！」

おめでどう、と明らかかな芝居口調で数拍拍手した後、クリスは片眉を跳ね上げて冷笑を口元にたたえた。

「あ、自分の利用価値云々に嫌悪感を抱いたつて顔だね、それは！うん、君はそういう純真なままで良いんだよ。僕だつて話しながら虫唾が背中を大運動会中さ！だけどねえ、こつちにも色々事情があ

るから」

嫌悪感で爛々と目を光らせたアラムに目配せすると、クリスはまたふざけた芝居口調に戻った。

「アラムみたいな人が姫を追い落とすと、ブリュイエール一族としては姫を屋敷に閉じ込めることができ、かつ跡継ぎ問題も白紙撤回、いいとこばかり。しかも、魔法学校で主席を取れるような人間なら将来有望、奨学金まで貰える程だなんていったら末は宮廷魔道師の筆頭だね。そんな人と所縁を結びたいと思うのは人の性じゃないかな？」

「お、俺が王宮の筆頭魔道師!？」

いきなり予想外のことを言われて、アラムの顎がかつくんと地面にまで落ちそうになったが、クリスはそんな事にお構いなくニコニコ笑いながら頷いた。

「うん。奨学金制度ってそんなに適用されるもんじゃないんだよ？魔道師なんてもんはお金があつたら自分の研究に全部つぎ込んでうような奴らだし。だけどそれでも金を出すのは、金を出しても学ばせたいほどの才能に溢れた魔道師の卵なのに金に困っているせいでその才能が潰されるかもしれない、でも奨学金なんてすずめの涙じゃ足りるもんじゃないって時に君みたいな勿体無い人間を救うために小金でコイツは優良物件ですよって札貼ってパトロンつきやすくするためなんだよ。判った？」

クリスは奨学金を小金といったがはつきり言ってアラムの生活水準位の家庭なら普通に食べていける程度の額だった。

その額を聞いて、これで生活費の心配をしなくて良いとほっと胸をなでおろしていたアラムだったが、クリスはそれ以上の条件をつけ始めた。

「どうだい？良い話だと思わないか、僕らにも、君にも。我が一族は哀れな姫を閉じ込める可能性が出来る。見返りに君には僕の家で安定した勉強環境を進呈しよう。きっと君なら魔法学校を好成績で卒業できる。首席ともなれば王宮魔道師としても採用されやすくな

るし、むしろうちの一族に覚えめでたくなつちやつたりして下克上当り前の安定性ゼロな魔術師じゃなく官僚の一人としての道を行くためのコネも出来る。ついでに君のお母さんの病気の世話までつけるぞ。母親に十分な看病も出来ず、日々の生活に苦心しながらの勉学の道を志して、挙句落ち零れていくのとどっちがマシだと思う？」

クリスに問いかけられて、アラムはじつと床を見つめた。

もしクリスが提示してくれた条件を全部実現できたら、母親は今の家よりもっと良い環境で療養できる。

自分も、一切の家事雑事から解放されて勉学に集中できる。

だが。

「……ちよつと、考えさせてくれ」

あまりにうまい話ばかりでアラムは冷却期間を欲した。何か裏がありそうで。

今までの芝居口調とか、一番最初にアラムを意味もなく引き回したこととか、色々な事が積み重なっていきなりクリスのことを全面的に信用できないというのが実際だった。

しかしクリスはその言葉に納得してうんうん、と大きく頷き、ついでアラムの手をとると今までにないほど真摯な口調で話し始めた。

「返事はいつだって良い。それよりこれはこれからの友としての言葉だ。君はこれから毎日のように同じような話を受けるだろうその時に、君の才能に惚れたただのただ埋もれさすのは惜しいだの慈善事業の崇高な精神だのといって美辞麗句で自分の欲望を隠すような人間より、利害の全てをさらけ出す僕のほうが遥かにマシな人間だということをお思い至つてくれると嬉しい」

異様なほど真剣な眼差しが、アラムの琴線に触れた。

クリスはふざけてるし、人を喰つたような口調だし、どっかおかしいけど、本音のところは良い奴なんじゃないんだろうか？

「……一つ、聞かせてくれ。お前は、俺がそのお姫さまを追い落とすにしても、本当に良いんだな？」

ぜひと、聞いておきたかった。

人を道具のように扱うことに虫唾が走ると、貴族の腐れた在り方に対する嫌悪感が言葉の端々から匂っていたクリスだったからこそ、確かめておきたかった。
だが。

「うーん、そうだねえ……」

クリスの表情に混じりだしたのは、凍てつきそうなほどに冷たい何かだった。

「僕はそれほど姫に優しい訳では無いよ。当主のやり方は手ぬるいと思ってるし」

「手ぬるい？」

「じゃないか？ 娘の口一つ塞がず自由気ままに育てて、今回の騒動を巻き起こしてさ。僕が当主ならまず間違いなく王太子妃として差し出して、本家の跡取りは一族の中から養子を取ることにするね。」

そして口うるさい親族のお偉方をいがみ合わせて力を互いにそぎ落とさせておきながら力の弱い親族の中でも純朴そうなのを見繕って力を与え、絶対の忠誠を誓わせて本家の地位向上に努める」

滔々とクリスが対ブリュイエル一族暗黒計画を語り終える頃には、アラムの顔色は真っ青に変わっていた。

それを認めて、クリスはぷつと吹き出した。

「嘘だよ。この温厚な僕がそんな恐ろしいこと考えたりするわけないじゃないか？」

「……考えなきや喋れるわけないだろ」

「冗談だよ冗談」

またも豪快に笑い始めるクリスを、アラムは疑り深げに見つめていた。

あの声色が、演技？

そう思うには、余りにも真に迫りすぎていた気がした。

と、その時、大聖堂の入り口付近が途端に騒がしくなった。

「何だ？」

「きつと、我らが姫がご到着遊ばしたんだよ」

クリスが皮肉げに流し目をくれた先に、微速前進をする黒い人だかりが。

興奮した人間に囲まれて、その輪の中心となる人間はアラムたちからはまるで見えなかったが、その集団の中で「初めまして、ジヨゼフィーヌ姫、私は……」だとか「お荷物をお持ちいたしましたでしょうか、ジヨゼフィーヌ姫、ちなみに私は……」だとか「ご入学おめでとうございます、今宵は我が家でお祝いのパーティーをご用意させていただきますので……」などなど、多種多彩なわめき声が飛び交っていた。

噂のお姫様もこりや大変だな、とアラムが他人事のように眺めていたその時、ひときわ甲高い声が群れの中心から上がった。

「お退きなさい！貴方たち、この私に入学式に遅刻などという不名誉なレッテルを貼らせたいの!？」

その瞬間、人波がざざつと割れて、アラムからも中心の人物が良く見えた。

白を基調とした絹のあちこちに銀糸でラ・ブリュイエール家の象徴である月の意匠が刺繍された式服にくるまれた、どう見てもアラムの腰ほどの背丈しかない……

「……ガキ!？」

今までの話から同い年ぐらいの美少女な姫を想像していたアラムは思わず本音をポロリとこぼした。

その声は静まり返った回廊中にやけに大きく響いて。

「……誰がガキですって？失礼ですけれども、私これでも淑女教育は全て一通り終えておりますのよ」

クリスと同じ金色の巻き毛を揺らせながら、憤然とした面持ちで少女がつかつかとアラムに詰め寄ってきた。

かつつとひときわ大きな足音を立ててアラムの目の前に仁王立ちになるとびしつと人差し指をアラムの目の前に突きつけた。

「全く、失礼な方ね。今からその非礼を私に詫びれば許してあげてもよろしくてよ」

「ヤだね！」

アラムは反射的に切りかえした。

余りにも貴族然とした口調と、見下し感全開の態度と、何と云っても身長差と年の差のダブルコンボのコンプレックス全てが相まって何故だか無性に反抗したくなったのだ。

「子供に子供って言って何が悪い？」

「貴方、子供じゃなくてガキって言ったのよ！？よくもこの私に向かって侮蔑的な内容を含む単語を投げかけたわね！」

互いにムキになって言い争いを続けようとする二人の間に、クリスが絶妙の間合いでまあまあと言いながら割って入った。

「姫、そんなにお怒りになつては折角の花の顔が台無しですよ」

強引に後ろからアラムの口を閉じさせ羽交い絞めにさせながら、クリスはジヨゼに魅惑的な微笑を向けた。

途端に、ジヨゼの目がまん丸に見開かれる。

「あら、クリス、どうしてここに？貴方官僚志望ではなかったの？」

「姫が魔法学校に進学されるというのに私がついていけない道理がどこにありますでしょうか？このクリス、姫の奴隷を己が身に任じておりますれば……」

「相変わらず調子の良いことね」

ふん、と鼻を鳴らしてジヨゼは視線をクリスから羽交い絞めにされるアラムに向けた。

「で、貴方こんな礼儀も弁えていないような野蛮人とお友達なの？」

「これからなる予定ですよ。何せ中々居ない逸材で面白いもので」

「確かに私に暴言を吐く人間は少ないけど……友達を選んでほうが良いわよ。それより離してあげれば？息出来なくて苦しそう」

「おや失敬」

ぱつとクリスが離すと、アラムは肩で大きく息をしながらクリスとジヨゼを見比べた。

「クリス、お前、俺を殺す気か！」

「ああ、アラム、もしそうになったら僕は君の為にソネットを惜しみ

なく君の墓前に捧げよう！」

よよよ、と悲劇のヒロインのように両手を上げて膝から崩れ落ちるクリスを完璧無視して、ジヨゼはアラムを睨みあげた。

「貴方、もう少し私に対する敬意というものを持つべきね。これからの学校生活でそれが身につくことを心から祈っているわ」

「何で俺がお前に敬意を持たなきゃいけないんだよ？俺は尊敬できる人間になら無条件で尊敬するさ。」

「あら、負け犬の遠吠えって私初めて聞いたわ」

「誰が負け犬の遠吠えだ！」

「だってそうでしょう？私、今年の新入生代表を任されたの。つまり、入試トップはこの私。実力は私の方が貴方より上なの。魔道師は実力が全て。貴方の上に立つ私に敬意を払いたくないだなんて、嫉妬？僻み？とりあえず、情けないことには違いないわね」

「なっ……！！！」

怒りの余りアラムが言葉に詰まってしまったその隙に、ジヨゼは「私入学式の打ち合わせがあるので失礼」とさっさと回廊の奥に姿を消してしまった。

ぷるぷると未だ怒りで体の震えが止まらないアラムの肩をぽんと叩いて、クリスはジヨゼの消えていった方向を見た。

「相変わらずだねえ、姫の容赦のなさは」

「……ったい、勝つてやる……」

隣に居るクリスにすら聞こえるかどうかの音量でぶつぶつと呟いていたアラムにクリスが視線を向けた途端、いきなりアラムが吼えた。「絶対あのクソガキに勝つてやる！！クリス、俺パトロンの話受ける！」

「ま、姫に勝つのは難しいと思うけど、頑張ってくれたまえ」

姫は国開きの魔道師に匹敵するほどの力を持つてるから、という重要な話を、クリスは自分の胸のうちだけにとどめておいた。

無駄に闘争心を煽るか、無駄に闘争心を削ぐか。

どちらにせよ悪い方向にしか働かなさそうなのが付き合いの浅いク

リスにも見えていた。

立太子

荘厳と華麗が淡い色彩を伴って具現化した空の城。

その一番中心部、大聖堂での馬鹿馬鹿しいほどに大層な立太子の儀式を終え、臨席した貴族たちはそろって大広間での祝宴に場所をうつした。

その貴族の中にはクリスも含まれていた。

そうそうに王子に『お声をかけていただく』順番を終え、壁際で盃を重ねること十数杯。

その間、一応ブリュイエールの末席に名を列ねる自分に蠅のように群がる妙齡の娘を持つ貴族たちを捌いていると、急に辺りがざわついてクリスの前の人垣がざざつと二つに分かれた。

その道の先には、先程挨拶したばかりの王子が穏やかな微笑みを涼やかな顔一杯に湛えて立っていた。

「クリステイ・セドリック・セバルカンテイ、ここにいたのですね？良かった、貴方とは個人的にお話をしたかった。」

よろしければ庭にでも出ませんか？と微笑む王子の笑顔を見て、王子に同性愛嗜好がなんて噂はあつたづけ？と警戒心を抱きながらも、クリスはおとなしく王子に従って広間を出た。

空の城の庭の一番外れの高台に設けられた東屋。

遙か下に民の営みの証の明かりの星海を望む風雅な場所にクリスは案内された。

事ここにいたって本格的に王子の性的嗜好を疑いながら、表面上は落ち着きを取り繕うクリスの内心を知ってか知らずか、王子は案内の近習を全て下がらせた。

用意した洒落たグラスに淡い色の酒を王子自ら注いでクリスに差し出すと、王子は話を始めた。

「クリス、君は魔法学校に通っているんだってね？」

その前置き一言だけでクリスは王子の用事を大体察した。

「ジョゼフィーヌ姫のことですか？」

「頭のいい人間と話すのは楽でいいね」

にっこり笑って王子はクリスの予想を肯定した。

「姫をゆくゆくは王妃にしたいと？」

「ああ」

クリスは溜め息をついた。どう考えても面倒事に巻き込まれた。

昔アラムに語ったもし自分がブリュイエールの当主だったらの仮定が急に現実味をおびてきた。

王子側からの働き掛けがあることを失念していたなんて、情けなしいにも程がある。

だが、王子の目のつけどころは正しい。

ジョゼの学友であり、ブリュイエールの末席に名を列ねるクリスは、ジョゼとブリュイエール一族の両方の動向を探れる人間で、利用価値はこのうえない。

ただ利用される側が頭の固いブリュイエール一族の矢面に立たされかねない危険性が高いだけだ。

……どう考えても割にあわない。

あんな爺共の集中砲火など誰が好き好んで浴びたいものか。

一瞬で全ての損得を考え尽して、クリスは即答した。

「お断りします」

「僕の話も聞かずに言っちゃっていいのかな？」

「お言葉ですが王子、私には利点が欠片もありません。ジョゼフィーヌ姫が仮に王子の元へ嫁がれたとしても、空席になった惣領の座は一族の末席に引つ掛かる程度の私には回って参りません。寧ろ親族内の争いに巻き込まれて痛い目見るのがオチです」

「中々に良い洞察だ。だが僕の切札を聞いてもまだ非協力的な態度を貫けるかな？」

王子の微笑に意地悪いものが混ざり始め、クリスは温和で聡明と名高い王子の仮面の下の本性を覗き見た気がした。

「確かにブリュイエールの内紛は一族の末席の君には脅威だろう。だが強固な後ろ立てがあればどうか？ そう、たとえば、王家とか」最後の一言に、クリスははっと目を見開いた。

「僕には妹が居るんだけど、興味ないかな？」

信じられない、という表情でクリスはマジマジと王子の顔を見た。王子は今、クリスに王女を降嫁させると言っている。貴族筆頭のブリュイエールとはいえ、傍系末席の自分よりも本家筋に近い若者はたくさんいるというのに。

「本気ですか？」

「ああ、本気だとも。史上初めて王家の血が貴族に流れ込む、その受取り主に、君を指名したいと言ったら？」

史上初？ そう、史上初だった、王家の血が貴族に流れ込むのは。

何故なら、王家の子どもは歴代皆、たった一人しか無事に成長しなかったからだ。

なのに今の王の子は目の前の王子と、そして近い内に社交界にでる王女の二人が健在で。

王家の後ろ立ては一族の石頭たちと渡り合うには十分すぎる武器。それこそ、自分が惣領になれる可能性が開けるほどの、切り札。

この話は聞く価値がある。だが面白い話には必ず裏があるという、とクリスは自分で自分に警告を発した。

「……どうして私をお選びに？」

「僕を見縊ってもらっては困るよ、クリステイ・セドリック・セバルカンティ。君も能ある鷹ならばもっと入念に爪を隠すべきだった」くつくつと一頻り笑うと王子はひたつとクリスの目を見据えた。

「僕の手駒はブリュイエール家の奥深くにまで食い込んでいる。自らの聡明さを隠し、権力闘争に明け暮れる親族たちの警戒心を背けるための狂人の振り。だけど、判る人間には判ってしまう脆さを孕む擬態だね、クリス。現に僕の手駒は見破った」

「ブリュイエールに手駒が居るのなら僕など必要では無いでしょう

「？」

「それが困ったことに姫の親しい学友となると、この世に二人しか存在しなくてね。君も知っての通り、アラムとか言う庶民は僕が利用するには接触するところからして難しい。だから、是非君には僕に協力してもらおうよ」

王子の董青色の瞳がきらりと輝いた瞬間、クリスは自分の負けを認めた。

鷹に狙われた兎の心地がして、圧倒的な格の差を思い知らされてしまったのだ。

目の前に居るのは自分より一回り近く若い少年だと言うのに。

クリスは暫く瞑目すると、そつと膝を折った。

「エルネスト王太子殿下、我が命、我が剣、永久に御身に奉らん」
古式ゆかしい儀礼にのっとりて跪いたクリスの頭に、王子はそつと手をかざしてその礼を受け取った。

「赦す」

「……心より忠誠を、お誓い申し上げます、我が君」

契約はなった。これでクリスの全ては王子の支配するところになった。

「これで漸く僕は自分の望みを叶える事が出来る。君の一族には本当に世話になるよ」

「……もしかして、もう一族の重鎮にはこの話を……？」

「大喜びで僕の前だと言うのに妄想の世界に旅立って行ってしまったよ。馬鹿ぞろいのお歴々が上に立ちふさがっているは大変だね、心底同情する」

この王子にかかつては粒ぞろいの狸爺どもが陣取る一族重鎮も形無しである。

孫よりも若いだろう王子にここまで見縊られた面々を思い出し、……クリスは深い深い溜息をついた。

本当に、愚者が上に陣取ると、苦勞が全て下っ端にまわってくるなんて、世の中不公平に出来ている、と。

「もうすぐ妹の社交界デビューがある。その場で姫との繋ぎを君に頼みたい。……できるだろう、君になら」
そう言つて王子は王者の貫録を滲ませてクリスにはほ笑んだ。

「おはよう、クリス！」

朝の光が差し込む気持ちの良い廊下で、ジョゼはいつもより数段元気な声で数歩先を行くクリスに声をかけた。が。

「……おはようございます、姫」

いつもなら軽く数分は詩の朗読のような挨拶をしてくれるクリスなのに、今日は全く精彩がなく、常に周りに飛んでいる花々も何処とは無くしおれているような気がする。

それにつられて、ジョゼの空元気も急速に萎んでゆく。

「クリスがそんなだと調子狂うわ。折角嫌なこと忘れようと思つたのに」

「嫌なことですか？」

「そ。昨日ね、小父様方がお父様にそろそろ私も社交界デビューをさせてせついたらしいの。何でも、私より一つ年下のマルグリッド王女殿下がデビューなさるから、私も一緒に、ですつて。私としては学校卒業するまでの後一年、何とか逃げ回つて研究に打ち込みたかつたのに、こう来られるとね……どうやらタイムリミットみたい」
相変わらず自分の利益が絡むとブリュイエールの人間は行動が早い。

昨日王子から話を受けて昨日中に動き出す一族の重鎮たちの年に似合わぬフットワークの軽さに侮蔑にも似た称賛を内心送りつつ、クリスは王子の依頼を一応果たしにかかった。

「姫ならば社交界と学術探求を両立できますよ。ぜひ、姫のデビューの際には姫の第一の従順なる下僕たるこのクリスにエスコートを御許してください。」

クリスがいつものように茶化して跪くと、ジョゼはちよつと考えてからはに cand だように笑った。

「そうね、どうせエスコートされるならどこかの馬鹿息子やパパよりクリスが良いわ」

全ては、王子の描く道筋通りに事は運んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2401z/>

空ノトリカゴ小話

2011年12月18日12時48分発行